

## 多部田を歩く

千葉市の遺跡を歩く会

多部田貝塚は縄文早期～晩期（8000～2500年前）に東京湾の海岸線から10kmほど離れた都川上流に形成された大型貝塚です。科学的調査が充分に行われていなかった時期には、さらに都川を遡った所にある誉田高田貝塚とともに、千葉市の大型貝塚が接する谷地への海進が議論されました。しかし、千葉市各地域の地層調査が進み、千葉市が最も栄えた縄文時代中期～後期の海岸線は国道14号線がその下を走る海岸段丘～千葉中央公園～県庁を結ぶ線上にあったことがはっきりしました。そこで、縄文中期～後期の人は丸木舟で都川を通過して海で漁撈を行っていたと考えられました。最近、貝塚の貝種の研究から、多部田貝塚の貝種は村田川水系に似ていると指摘されています。貝塚を見ることは、縄文時代の人々がどのような暮らしをしていたか、考えさせてくれます。

1. 多部田貝塚（縄文早期～晩期） 《 P 参照 》
  - 西に開口する直径約120mの馬蹄形貝塚。 標高40～42m。 谷地との比高は約20m。
  - 貝層はイボキサゴの個数が80%以上。 ハマグリ、シオフキ、アサリなども見られる。
  - キサゴ以外ではハマグリが50%以上を占め、中型であるため目立つ。
  - 貝塚は馬蹄型を呈しており、大部分は台地上にあり、開口部は斜面にある。
  - 杉林にある。斜面部分と流れ込みは道路建設のため削平された部分があるが、他の保存状態はいい。
  - 製塩土器が出土したことから、縄文晩期に霞ヶ浦地域とかかわりがあったことがわかる。
  - 石皿、スリ石が出土したことから堅果類を調理していたことが想像される。
  - シカの骨、イノシシの骨、スクレーパー（肉調理用石器）が出土することから、狩猟が想像される。
  - クロダイなどの骨が出土するが、点数は加曽利貝塚に比べて少なく、漁撈は活発ではなかった。
  - 貝輪が出土することから、南関東地方との交易もしくは航海して採取したことが想像される。
  - 磨製石斧が出土したことから、木を伐採し、住居、種々生活必需品を作成したことが想像される。
  - 縄文時代以外に、古墳時代、中世、近世の遺跡も存在する。
  
2. 貝種の割合 《 P 参照 》

2/23の「歩く会」で平山地区の貝塚を見学しました。その際に、菱名貝塚、台畑貝塚、築地台貝塚の貝は、村田川河口の海で採取されたものが最近の研究であることがわかってきたと紹介しましたが、多部田貝塚の貝種も平山地区の貝塚と同様な構成であることがわかります。

縄文時代の多部田貝塚の暮らしが、村田川にかかわりがあった可能性もあります。

参考・縄文中・後期貝塚の貝種組成比較（都川水系：村田川水系）

イボキサゴが最多であることは共通

都川水系： ハマグリは二枚貝の半以下、シオフキよりアサリが多い

村田川水系： ハマグリは二枚貝の半以上、アサリよりシオフキが多い

次の図をスキャンニングします。

『千葉市多部田貝塚』 2001.3 千葉市教育委員会（財）千葉市文化財調査協会

P3 第1図、 P4 第2図、 P32 図22～25

『千葉市うならす遺跡』 2001（宗）最福寺（財）千葉市文化財調査協会

P4 第4図

（都川通信 No.103 p5 図2）